

僕の今まで、 これからの僕

●
後藤 剛

僕の今まで

1969年1月17日、大阪にて生まれる。だから今年でもう18歳。一人っ子なのでか、独りで何かをしているのが好きで、すぐに凝る。凝ったら、暗くなっても自分の部屋から出てこなかったそうだ。また、両親が共働きなので、ゼロ歳6ヵ月から保育所生活を送り、社交生活は手慣れたものであるはずだが、あまりうまくない。自閉的性格なのかしら？

でも、いちがいにそうとは言えないらしく、小学校時代の僕は知的好奇心旺盛で、まさしくギャング・エイジだった。とくに5、6年の時はスゴイ！今思いだしても愉快になる。まず、我ら仲良し5人組で、エンゼル探偵団なるものを結成した（この子たちとは今でも友達で、年賀状の常連だ）。推理小説の読みすぎか、学校の放課後、空いた教室にかくれ家をつくりかけまわっておった。誰もいなくなった校舎を冒険するあのときの興奮は、今の僕の物理学をするときの気持ちにつながっている。スリル満点だった。推理小説のとりこになった僕は、江戸川乱歩シリーズ46冊を全部制覇し、ルパン、ホームズもかたっぱしから読んだ。一日に4冊も読んだことがあり、そのときはあっちの筋とこっちの筋がゴッチャになり、おまけに頭もくらくらしてきていたから、幻覚症状が出たのか、自分が明智小五郎だと信じてしまったことがある。

百人一首を全部覚えたり（スグ覚えたように思う。暗記なんてのはやる気になればなん

とでもなるものなのだ！）、算数の応用問題をやりまったり、理科の実験を議論したり（あのテコの原理、あれが不思議でならなかった）、ピン球野球に、ビー玉、暗号遊びに、迷子遊び（日曜日にみんなエンゼル探偵団で集まって、わざわざ迷子になりに行くのだ。知らない土地からいかにして帰るか？ なわけだが、一度ならず帰れなくなり、本当に焦った！）……etc、次々に新しい遊びを発明して行った。

そうそう、ゴルフを中庭でしたことがあるんだ（ゴルフを学校でやったのは僕らだけに違いない）。あの小学校のベルマークのカサで、ボールを打つんだ。中庭に穴を掘り、これが1番ホールこれが2番ホール……と18番ホールまでキッチンとつくり、なになに大会と名前までつけてやった。それに熱中するものだから、始業のベルがなり終わっても、それから3ホールやり、そして便所で何アンダー、何ボギーと確認して、それからやっと教室へ向かう始末。そんなふうだったから、母は呼び出されて注意されたそうなのだが、僕はいっこうに気かけなかった。学校は遊び場以外の何ものでもなかったのだ！

少々悪のりすることもあったが、それでも心身ともに健康だった。そういえば、僕の学校は公立だったが、テストに点数はなく、成績も言葉で書かれ、5とか4とかそういうのは、いっさいなかった。だから、誰が頭がいいとか、そういうのは生徒間で全然なかったのだ。ただ、新しい遊びを次々に発明する者が、みんなから尊敬された、そうしてそれは僕だったのだ！（僕が勝手にそう思い込んどるだけかも知れんが……）

そういや、女の子にももてたな。今の僕からは想像もつかんだろうが、とにかくひっぱりだこだったのだ。いや、タコではなく、クマなのだそうだ。

中学に入って

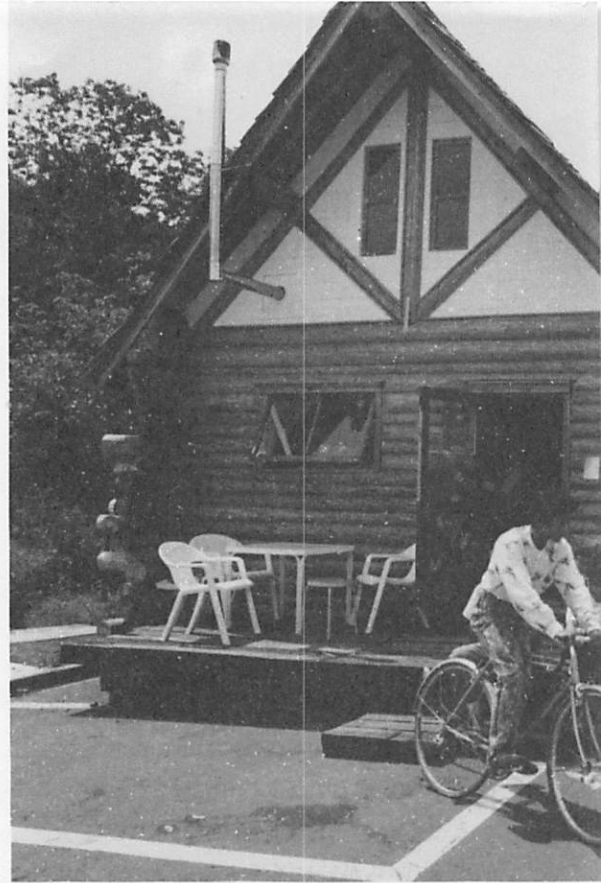
こんな調子の僕は中学に入って大いにまいった。テストに点数、成績表、内申書、5・4・3・2・1、偏差値、優等生、劣等性、不良、非行、校内暴力、いじめ、シカト、体罰、朝礼、生活検査、制服、頭髪、規則、管理、たばこ、セックス、欲望、歪み、差別、コンプレックス、容姿、顔、心ない先生、受験……。

ユングの言語連想法ではないが、ありとあらゆるこの種の言葉が頭の中をかけめぐった。今でもこの種の語には、あの学校の（表現できぬ）あの雰囲気からみついている。

頭の中は混乱し、どうしていいのかわからなくなった。しまいには、テストの点数が気になりだして、歯車の一部にされたようだ。知らぬ間に自分の心に浸透してきて、知らぬ間にそうになっていたのだから、今思い出しても身震いする。きっとファシズムはこんなふうをやってくるのだと思う。もしかしたら、もうやってくるのかも……怖いことだ。

正直いって、中学校時代は、あまり思い出したくない。僕にとって、春を思うなどという思春期ではなかった。たて前では、さまざまな標語をかざりたてて、「みんなで仲良く、がんばりましょう」といっているくせに、そうさせまいと、点数でみんなを序列し分断しているんだ！

僕なんか、優等生に仕立て上げられたから、あやうく自分を失いかけた。変に優越感をもたせられてしまったのだ。小学校の頃は好奇心旺盛で、宿題は忘れても平気で、(もっとも、忘れものは中学でもなおなかった。僕の場合の救いは、学校と家とが断絶してあったことだ。だから、家に帰れば、学校のことは忘れられていられた、で……朝、教室に入って教科書を取り出してから、宿題があったことに気づくというわけだった。変わったことは、平気でいられなくなったということだ。下手



をすればどつかれるのだから……) 先生なんかちっとも怖くなかったこの僕が、テストの点数を気にしだしたのだ。わずかの点数でびくびくした。点数の威力とはスゴイもんだ。ポヤーンとした性格の僕を“気にしい”に変えてしまったのだから……。

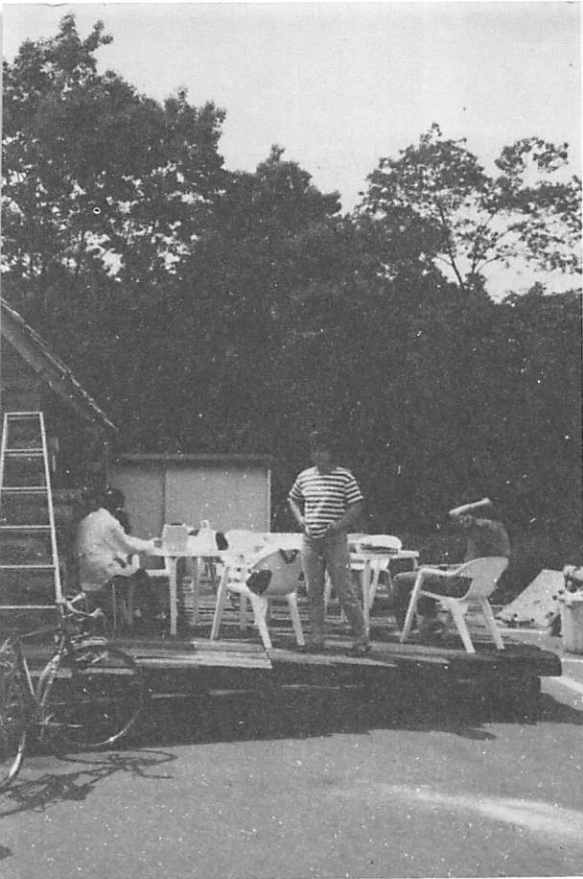
しかし、中2の二学期の終わりになって、まだ頭ではわからなかったが、からだのほうからおかしくなってきた。

どうしても、学校に行けなくなった。他人の目がスゴク怖かった。

2週間ほど不登校をした。が、そのときはなんとか休みながらも行った。毎日がスゴくしんどかった。

3年になると、小5からの友達(エンゼル探偵団の団員の一人)と一緒にになったこともあり、なんとか行けるようになった

しかし、僕の心の傷は癒やされなかったと思う。社会にうごめく人間が、しようもなく



手作りのログハウス

見えていた。でも、人間に対して、最後まで
はあきらめきれなかったのだと思う。だから、
いっぱい本を読んだ。そんな本の中に、遠山
啓の『競争原理を越えて』があったのだ。学
校システム、学歴社会がだんだん見えてきた。

どうして、生きるのか？ なぜ、学ぶのか？
ということ、何度も自分に問うた。一方、
学校ではますます受験準備に熱をいれてい
った。しかし僕はもうこの歯車に巻き込まれ
まいと思った。

「バスト何センチ、ウエスト何センチ、ヒッ
プ何センチ、あわせて何センチ、ほう、デカ
イ女ですねえ……」

数学何点、国語何点、英語何点、あわせて
何点、ほう、ガンバッタものねえ……」

(by 『ものぐさ数学のすすめ』 森 毅)

このことが、このアホラシサが、理解でき
るようになった。つまりは、やっと「たし算」
の意味がわかったのだ！ そうすればこっち

のもの、もう怖いものはない。あの好奇心旺
盛な自分に戻ればイイだけなのだ！

反テストの旗をかかげ（実際、何度も職員
室に足を運んでは、先生に論議をふっかけて
おった。僕にはもう怖いものはなかったのだ！

といっても生活指導の先生だけはキチンと
避けた）、自分の興味のままに勉強することに
決めた。

受験なんてクソ食らえだ！

高校に行こうか、行くまいか、大いに悩ん
だ。同じような学校には絶対行きたくなかつ
た。「自由を校風にしている高校をかたっぱし
から探してみよう……（このとき「自由の森学
園」は影も形もなかったのだ！）、箕面の自由
学園から、遠く東京町田市の和光高校まで見
に行った。しかし、下宿がうまくみつからな
かったり、いろいろ問題が出てきて、結局あ
きらめることになった。そうして、しかたなく
地元の公立校（市岡高校、甲子園に出たこ
とがある！）を受験した。正直いって、合格
発表の時自分の受験番号を見ても、あまりう
れしかなかった。眺めながら、この学校での
自分の行く末を案じておった。とにかく、そ
のときはもう自分の好きな勉強を妨げられる
のが何よりつらいことだったのだ。僕はもう
二度と歯車の一部に、絶対、どんなことがあ
ってもなるまい、なってたまるもんかと決心し
ておった。

なぜなら、僕は人間だからだ！

高校時代……

高校時代は、完全な学校不信、非行生徒だっ
たから、どうしても学校にはなじめなかった。
今度は同級生にも腹がたった、しけた面して、
まったく無関心、無気力、何言ってもかえっ
てこないのだ。「のれんに腕押し」はこっちが
疲れるのだ！ 勢い余って、こっちがぶざま
に倒れてしまう。とうとう1年の夏休み前に

胃に穴をあけてしまった。おかげで、夏休み中キリキリしどおしで、注射を30本もされた。それから、どうもギコチなくなった。自分の好きな勉強にも食傷気味で、うまくいかなくなってきた……（僕は今でも、自分の好きな勉強が行き詰まってくると、鬱気味になる。たぶんここに、自分のアイデンティティと自己愛とが絡みついているからだろう）。また、どうしても学校に行けなくなってしまった。

今度は40日間も不登校をした。その間もまた思索の時だったが、この時は精神的にも大変疲れていた。しかし、なんとクラスの女の子が見舞いにきてくれて、話をしているうちに、僕は単純な方だから、また、学校に行こうと思ひ直した。

それから2年になって最終的に中退するまで、行くには行ったが、僕の学校嫌いはやっぱし変わらなかった。依然としてテストはあったし、しけた面の生徒もいた。しかし、その時はもうそういうことに対する抵抗力はついていたと思う。ただ、自分の好きな勉強ができないことが、ものスゴくつらかったのだ。

つまらない授業に毎日6時間もつき合わされる。よくもまあ、あれほどつまらなく教えられるなあと思う。「こっちは金払ってんだぞ!」とどなりたくなるが、おかしなことに悪いのはいつも生徒のほうになってしまうのだ。生徒のほうもそれで納得してしまうから、度を越して気味が悪い!

「こら、そこ、だまれ!」

「おまえらのためなんだぞ」

どこら辺が僕らのためなんだ?

僕は、つまらんことはつまらんと思ひ、美しいものは美しいと思ひ、わからんかったら、わからんわけで、わかったたら、ワクワクしてくるのだ!

そういう、自分の心の底から湧き上がってくる感情を大事にすること、これが、なによ

り、自分のためなんだと思っている。自分の感情をおし殺したとき、自分は自分でなくなってしまう。ありのままの自分でいられることが自由であるということで、ありのままの自分をもっているということ、これが自立しているということではないか?

つまらん授業をおもしろいと思うことは、僕にはできません。そして、僕はつまらんことに時間を費やすのには耐えきれん性格なのだ。それを半ば強制的にやらされるのだ!

サボる権利があっても、「つまらん授業やけど、聞いてね」とでも言ってくれたら、僕も情けで聞いてやるが、こともあるうに、

「物理はたいくつやと思うけど、実は先生も嫌いやったんや。だから、その嫌いな気持ちはよくわかる。でも、受験に出てくるから、いっしょにがんばろうね」

と言った先生がおった。2年になって物理学が始まるというから、少しは楽しめるかな、とちょっぴり期待していたのに、最初の時間で裏切られた。

物理学を侮辱したのだ! 自分の授業がつまらんというのならわかる。しかし、それを物理学に罪をなすりつけるのは最低だ!

ある日の授業中、その先生は、ベクトルがまるでわかっていないことに気が付いた。一次元ベクトル量とその大きさを混同して使っているのだ! つまりは変位と距離の区別ができていないらしいのだ。そこで座標変換なんてことをするから、メチャメチャになる。まあ、矢印を黒板に書いているから数値はあるものの、何のためにベクトルが物理学で重要されているのか、全然わかっていないのだ!

そこで質問したら、全然僕の言うことがわからないらしいのだ。そして、とうとう僕を無視しやがった。冷静にしていたつもりの僕も、堪忍袋の緒が切れた。次の時間はボイコットしてやった。ところが、彼は全然気がつか

なかったのだ。幸いなのかなんなのか、僕はあきれてしまって、いや、もうあきらめてしまった。彼はただ、教室に座っている不特定多数に授業しているだけなのだ。誰々という個々の人間に教えているつもりなど毛頭ないのだ！ そのくせ、少しうるさいだけで「こら一、おまえら、俺をなめんなよ」とヒステリックに怒鳴り散らすのだ。なめているんじゃない、もうあきらめてしまっているのだ！

僕の大好きな本に『ファインマン物理学』があるが、大嫌いだ。実に楽しい。ああ、なるほど！と思わずうなずいてしまう。ファインマンの物理学を愛する気持ちが（実際、自伝『Surely Youre Joking Mr. Feynman』のp.63に「I love physics」とある！）ズンズンと伝わってくるのだ。やっぱし先生たる者、その学問を本当に好きでないと、教えることはできないと思う。いや、好きでないと、教えてはイケナイのだ！

僕は、数学、物理学を考えていると心が躍ってくる。ワクワクしてきて、トランス状態に入ってしまうのだ。その時は、日ごろの小さいことも気にしなくなる。何を言われてもいっこうに平気なのだ。女の子の前で、僕は「ぶおとこ」だと思ってしまう、おかしなコンプレックスもふっとんでしまうのだ！とにかく数学、物理学を考えたい。それだけになるのだ！生き生きしていると思う。

僕はその時の自分がいちばん好きだ。人間にとって、自分が生きていると思えるとき、そのときが、なにより嬉しいにちがいないのだ！

でも、今の学校は、そうはさせまいと躍起になっているように思えてしかたがない。だから、みんな、あんなしけた面になるのではないか？ エンゼル探偵団の団員も、このごろなんか生気の抜けたような顔をしとるのだ。学校で生気を抜かれてしまったにちがいない。

僕には、物理学があったから、そうならずにすんだ。しかし、生気を抜かれんようにするのは、大変しんどいことなんだ。朝の7時から（通勤電車で揺られて約1時間）、夜の7時（僕は空手部に入った。2年の時は部長になってしまったのだ）まで、ずうっと生気を抜かれまいとしとかなくちやいけない。当然、疲れる。頭がガンガンしてきて、ものが考えられなくなってくるのだ。そんなときは星が見えなかった。

夜、自転車で、本屋に行く途中、星は残念ながら見えないけれど、月が出ている。誰が何と言おうと、月は出ている。あの丸いでこぼこの球体が、ちゃんと浮かんでおるのだ！不思議でたまらない。

あの月からこっちを見ると、どうなるのだろうか？ イマジネーションはどんどんふくらみ、途方もなく大きい宇宙を考えてしまう。宇宙、それはやっぱりあるのだ！僕の存在のちっぽけさを思い知らされる。

ちよっぴり背筋がゾクツとして、次の瞬間いい知れぬ快感がやってくる。それでも、僕は生きているのだ。その存在を精いっぱい主張しようと生きているではないか！耳を澄ませば、心臓のドキドキという音が新鮮に聞こえてくる。

僕が物理学を好きな理由の一つに、このようにスケールの大きな隔たりを、さまざまなレベルの視点で行ったり来たりして遊ぶことがある。日常のつらいこともちっぽけに見えて、また日常に向かえるのだ。

僕は、中学、高校と、いつも思っていた。どうして、互いにビクビクと自分の感情をおし殺してはくちやいけないのか？ なにか息苦しい、押し込められているような気分。個と個が殺しあう全体。

分子の運動をイメージする。初めさまざまな運動エネルギーをもっていた個々の分子も、



スクールバスで

衝突を繰り返しているうちに、平均化されてくるのだ。一様な世界。もはや、個性はない！

これが宇宙の摂理なのか？ いやちがう！ たとえそれが熱力学の第2法則であっても、局所的には破ることができるはず。そして、それを破ろうとしているのが、生物ではないか！（もしかしたら、「生きる」というのはこういうことかな？ と勝手に解釈して悦に入っている）

だとしたら、今のようなモデルは、人間には合わないんだ。個と個が生かしあう全体！ これでなくっちゃ！

森穀の大好きな雑木山をイメージする。いろんな木が、おれもおれもと生きている。あっち向いてこっち向いて。われ聞せずで生きている。でも、1本も欠けちゃダメなんだ。どんな変な木にも、その存在の価値がある。変な木もみんなから見守られて、胸を張ってのびのびと生きているんだ！ いや、もはや「変な木」なんてないんだ！

学校は、杉山であっちゃいけない。雑木山であってほしい。僕はそういう学校、社会が存在し得ると信じている。原子のない時代に、原子が存在し得るモノであったように、生命

のない時代に、生命が存在し得るモノであったように、人間のいない時代に、人間が存在し得るモノであったように……！

おととしの6月1日、どうしても杉山のような学校におれなくなった僕は、とうとう中途退学した。そうして独学時代にはいる……。僕は、自分でいうのもなんだが、この1年半、独りでよくやってきたと思う。遠藤さん（「自由の森学園」で生徒たちがこう呼んでいたのが印象的に残っている）が、『自由の森学園——その出発——』で、

「しかし、そこでぜひ考えてほしいのは、相手を否定したら、それでは自分に責任を持った生き方を自分はどう選択し、創り出すか、ということです。学校を拒否し、教師を拒否し、親を拒否して、相手を拒否したけれども、それと同時に、自分をもだめにしてしまったら、なんの意味もないわけです」

と言っていたけど、僕は自分をダメにしなかったつもりだ。何より、自分を大事にできた！

9ヵ月間、新聞配達もした。毎朝4時30分に起きていろんな家庭に新聞を配る。「雨の日も風の日も……」という言葉が今では景色もっている。日曜日もなかったのだ。でも、給料日は本当にうれしかった。自分でかせいだお金なのだ！ 僕はあれ以来ケチになったようだ。ジュース1本買うのにも、何軒配らなあかんのかな、と考えてしまって（計算すると、14軒）、その光景まで思い浮かべてしまうと、もうダメなのだ。家のお茶ですましてしまう。大変だったけれど、それでも学校に行くよりはマシな気がした。学校では、自分が自分でなくなってしまうが、新聞は自分が配るのであり、給料をもらうと、自分がちよっぴり偉く感じられるのだ。そんな時は朝日がマブシく感じられる。

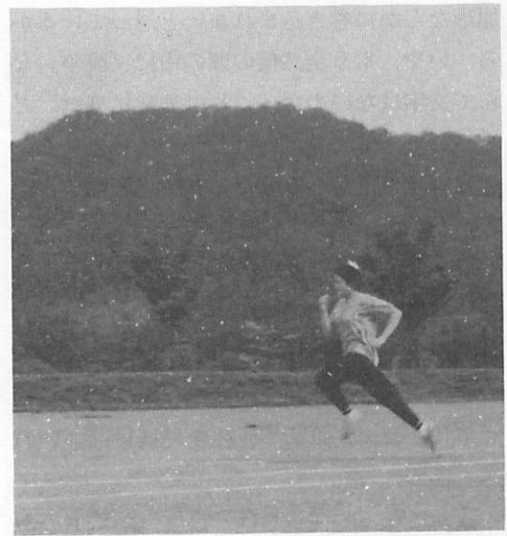
全くの独学だったから、自由の大変さが身

にしみてわかった。今日、朝起きてまず何をしようか、数学のあそこをもっとつっこみたい、あれとこれとが関係してきてそろそろそっちのほうにも進みたいが、まだ、こっちの方がひっかかっているから、まず先にこっちからだな……図書館でしょうか、家ででしょうか……何もかも自分で決めにゃならん。迷いに迷ったあげく、エーイどうにでもなれ！ と行ってススム術も身につけた。

僕は計画を立てても、どうもうまくいかないんだ。知らん間に興味の方向が、あっちゃ向いてしまうのだ。これには正直いって困った。僕はそういう興味に忠実にあっちゃいき、こっちゃいきするのは楽しいからイイと思っているが、自分の身の上が頭をよぎると、たまらなくなるのだ。独り壁を見て、考えなきゃならん。精神状態がおかしくなる。あげくの果てに、精神分析の本まで買ってきて、自己分析までせにゃならんようになる。それでも持ちこたえてきたのだから、われながら、なかなかしぶとい。でも、自分というものがあるのが何よりうれしい。屈折して矛盾して、僕の心の中もいろいろ大変なんだが、今はそれが人間の味だと思って楽しんでいる（いやあ、やっぱり大変だな）。

大検合格したときは、本当にうれしかったな。涙が出てきた。実をいうと、合格するとは思ってなかったんだ。独学だからムラがある、全然知らないことがいっぱい出てきた。しかし焦らなかつたな、むしろ楽しんでたんじゃないか？

これも独学によって身につけてしまったことなのだ。未知の海をどうススムか？ 今の自分を頼りにして、その頭の中から、ススんでいける材料を探してきて、その海に合うように組み立てて、まがりなりにも漕ぎ出すのだ！ あまり遠くへは行けないが、パッと視野がひろがるかもしれないし、もっとイイ材



走ることが楽しい

料が見つかるかも知れない、それで穴のあいている所をふさいで、またススムというわけなのだ。焦ったってなんにもならない。あわてふためいたところで、沈没するのが落ちなのだ。気長に、のんびり、ユックリ……けっこう楽しいものだ。そのうち陸地が見えてくるだろう。もしかしたら、それは人類未踏の新大陸かもしれない（なんてことも思えるから、ワクワクするのだ）。大検の問題もその調子でやった。あの本でこれ見たことあるなー、こうすると、あっちに書いてあることと矛盾するから違うし……、あっ、こうか！ そうだ、これだ、とすると……まるでパズルだ。それで合格したのだから、いやいや僕も大したものだ。

ところが、これで大学受験もうまくいくか？ というと、そうは問屋がおろさない。政府もうまく考えたものだ。政府はよほど考えない人間が好きらしい。僕の友達によると、あの共通一次の秘訣は、考えずにやることなのだそう。僕なんか絶対、「足きり」でOUTだ（今年は、「自由の森学園」にかけたので受けていない）。

でも、別に構わないのだ。もう絶対に競争

原理なんかは巻き込まれまいと思っているから、いや、もう全然僕の頭の中に「競争」なんて文字はないのだ。これは非常に楽だ。どうやったら生きていけるわい、と思える。僕には僕の道があるのだ。高村光太郎の『道程』を思い出す。

僕の前に道はない

僕の後ろに道はできる

胸を張って「彼方をめざせ」(『心さわぐ青春の歌』)

「平和と自由、求めて、生きてゆけばいいのさ」(『ケサラ』)

独りになって、少しは“ひと”ってものがわかったんじゃないかな。少なくとも、なんで「人間独りでは生きていけない」と言うのかは、わかったつもりだ。

いろんなことがからみあって悩んでいたある日、小学校の隣にある文房具屋にノートを買いにいった。ムツリしながら、お金を渡すと、おばちゃんは、小学校のときの僕を覚えていたらしく、

「わあー、大きくなったねー」

と言ってくれた。ニコッと笑っているものだから、僕もついニコッと笑ってしまって、「おばちゃんも元気にしてる？」

と言った。

会話はそれだけだったが、家に帰る途中、妙にうれしくておかしくて、涙までこみ上げてきた。「ああ、僕には今、“ひと”が必要なんだなーって」そのとき悟った。

それが去年の10月の中頃、その^{ひとつき}一月後に、自由の森学園の公開研究会があったわけだ。

これからの僕

こういう人生を送ってきた僕にとって、自由の森学園の公開研究会は一つの大きな出会いになりました。

木幡先生の授業、感動しました。授業であ

んなに興奮したのは生まれて初めてです。今度は生徒として出てみたい。

「個の“はぐれ”の状況が集団の“はぐれ”にと転化していったとき、授業は教師が想像するより、はるかに深いところまで追求される」(「ひと」08-86 P.106、家に帰ってもう一度読んでみたら、友達になった子〈満留隆斗君〉も出ていて、うれしくなりました)

「……そして、集団のすばらしさを知ってほしい」

“個と個が生かし合う全体”は本当にあるんですね。みんな生き生きしていました。

高1の有志が開いていた討論会。僕も発言させてもらいました。みんなよく考えているんですね。いいなあと思いました。

2日目の体育館での合唱。「心さわぐ青春の歌」で涙がこみ上げてきて、こらえきれず泣いてしまいました。今までのさびしさが一度にふきだしたようでした。

終わってからも3日間、板橋区にある叔父の家から通いつめました。いてもたってもおれなくなったのです。学園は休みだったので、自由の森の丘の上に座っていろいろ考えていたんですが、何度も何度も涙がこみ上げてきて……、「絶対ここに来たい、ここで自分をとり戻したい」と思いました。「もう独りは嫌です！」

そして松井先生に会い、決意を固めました。

学園にもいろいろ問題もあるみたいだけど、あたりまえですよ。他の学校じゃ外に見せない分、個人個人の心の中に、重くもっているんです。僕の心の中にも深い傷があります。それもここでなら癒やせそうな気がします。

どうか、よろしくお願いします。

今、自由の森学園の生徒になって

「自由の森学園」に入って、1年半たった。

高校生を二度やることになったが、感想と

して、「……でも後悔はしていない」という表現は用いたくない。それは、「後悔しているんじゃないか？ いや後悔していないさ……後悔しているんじゃないか？」という葛藤がまずあって、「でも後悔はしていない」とつづくものだと思うからだ。いろいろ悩み、考えはした。それはそれは、いっぱい考えた。しかし、そういう葛藤はなかった。

なぜだろうか？ 「疎外している自分を、人間回復させるところはここしかない」という直感。また、「自分ひとりでは自分をかえられない。人間というものは、やはりまわりの人間との人間関係の中でだけ自分を変革していくことができる」(byいぬいたかし「私の中の私たち」P126) という認識が、言語化以前の感性的なモノであれ、僕の中にあっただと思う。

だから、僕が絶えず「自由の森学園」で考えてきたコトは、「その中で具体的な場面、場面において、いかに、どのようにして、どういふ具体的な行動——実践をすれば、疎外し

ている人間（自分をも含めて）を、人間回復させ得るか？」すなわち、「その具体的な場面、場面において、まわりの人間との人間関係の中で、ホントに人間的なモノをつくりだしていくには、具体的にどうすればイイのか？」であった。そして、今もそのコトを考え続けている。「……こうして、人間の本質を対象化することは、理論的な点においても実践的な点においても必要不可欠なのである。——人間の諸感覚を人間的ならしめるためにも、また人間のおよび自然的存在のまったき富に呼応する人間的諸感覚を創造するためにも」

さあ、学園祭、今年はみんなと何をつくらうかな？

1988.9.5

(高校2年)

後藤剛くんは現在高校2年の在校生。ここへ来るまでの“自分史”を読むと、「若者にとって必要な学校とは何か」を考えさせられる。

——編集部——

伊藤愛里子(自由の森学園中学2年)の詩

夢がかがやくその日まで

あるいてゆこうか やすんでゆこうか
夢がかがやく その日まで
スキップしていこうか 道草しようか
夢がかがやく その日まで
はしってゆこうか たちどまってみようか
夢がかがやく その日まで



ゆめ

ゆめものがたりのために
なみだをながせる人は
幸福です

ゆめ

ゆめとめざめ
よくにている
現実なんて
どうでもいいから

教育改革の原理を どこに求めるか



日高六郎

いま誰しもが日本の教育は改革しなければならぬと考えています。政府自身、臨時教育審議会を発足させ、それは三年余りをかけて、数次にわたって改革案を発表しました。

実は、臨教審が発足するとほとんど同時に、都留重人さんを座長に、私たち有志は「教育問題研究会」をつくりました。すでに三回ばかり意見を発表しましたが、臨教審答申が出る段階で、私たちの意見もまとめて、『教育改革の原則——どこをどう変えればよいのか』（岩波ブックレット）という小冊子を出しました。

このメンバーは教育学者の大田堯さん、山住正己さん、憲法学者の小林直樹さん、あるいは芸術家では羽仁進さん、間宮芳生さん、中野孝次さん、女性では、YWCAの関屋綾子さん、永畑道子さん、ちょっと異色な方としては、高史明さん。お子さんが自死するという厳しい経験を経て、今も思想家として発言しておられます。外国人がこういう日本の教育問題を考えるコミッティに入ることは、私は積極的な意味があると思うのです。その他多くの方々と一緒に『教育改革の原則』を発表いたしました。

この教育問題研究会は、単純に臨教審の向こうを張ってというよりも、学問的な立場や文化を大切にする立場に立ち、特に子どもたちの立場に立って、日本教育をかなり長い射程で話し合おうということで集まったわけですが、臨教審についても触れています。

都留先生は、今の教育改革の問題を考える場合、まずなによりも現在の「教育をとりまく社会的・政治的環境」を検討すべきであることを強調しています。

臨教審答申でも「子どもたちの心の荒廃をもたらした原因と責任は、その最も深いところで大人社会全体にあるのであって、子どもたちはその犠牲者である」と述べていますが、